

北辰会方式による穴性

奥村裕一
(一社) 北辰会 理事 学術部長

北辰会方式は、現代中医鍼灸学にいう「穴性」を参考にしつつ日本鍼灸古流派の思想、選穴、手技にも学び「実践から理論へ」の立場から、少数配穴（原則一穴）を貫くことで、当会独自に穴性（効能）の真偽を試してきた。結果、現代中医鍼灸学で説かれている穴性論は一面的な部分があり充分ではない、という見解に至っている。

少数配穴についてはすでに明代・李梴著『医学入門』においても“百病一針為率、多則四針、満身針者可惡”と記載がある。また本邦の雲海士流・柳川流では明國の雲海に学んだ朝鮮の金徳邦から伝承されたとする流儀書に『廣狹神俱集』がある。その内容から書名について『柳川流鍼術秘訣』には“針數 鮮^{すくなく}而治法全廣^{ひろし}”と記載があり、少数鍼の重要性を説いている。このようなことは穴性（効能）の真偽を明らかにする上で非常に重要なことと考える。

まず明確にしておきたいのは、その穴性を最大限に引き出すには、選穴作業段階として、正しい弁証と切診における経穴の反応を正しく判別できることが大前提であり、その上で適切な補瀉を行うことである。北辰会方式では複雑な手技を用いることは殆どなく、シンプルに穴の虚実の反応に気の集散をはかるこを以て補瀉とし、同じ経穴でも、その反応とそこにどういう術（補瀉）を加えるかで、発揮される穴性が異なるのである。たとえば、温病の衛分証から気分証の段階の患者の外関穴が実の反応を呈していたとする。そこに瀉法を施すと疏風清熱や清熱祛湿など、風熱や風湿熱をさばく効能が発揮される。一方、衛氣虛の患者の外関穴が虚の反応を呈していた場合に、そこに補法を施すと益氣固表などの効能が発揮される。

また、より穴性を発揮させるために、同類の穴性を有す経穴候補の中から、どの経穴に施術するかという問題に関しても、空間的気の偏在位置から決定する方法も突きとめている。いわば、「空間診による空間配穴理論」と「穴性配穴」のコラボレーションである。ある腎虚の患者に対し、益氣補腎したい場合に、太溪・大巨・胞肓・天井に虚の反応が診られ、どこに選穴するか迷うことがある。空間診で明らかに「上」と出ておれば、上半身にある天井を取穴しても補腎の効果が大いに得られる。専ら、空間診を無視して太溪や胞肓を選んでも一定の効果は得られるはずである。ある経穴の穴性を解明するには、診断手順（弁証）と方法（切診と施術の技術）が確かなものであった上で、その経穴のみにアプローチして患者の変化を追っていくことが極めて重要と考える。

我々が提唱している穴性解釈は、実際の臨床において北辰会方式に準じて追試いただければ、再現して納得いただけるものと考えている。詳細は、藤本蓮風著『経穴解説 増補改訂新装版』（メディカルユーコン刊）に譲ることとする。